

ヒマラヤ

No. 105

●特集 ケダルナート—H A J登山学校



1980 AUG.

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1981年ヒマラヤ登山学校隊員募集

——ナンダ・コット(6,861m)の許可内定——

H A Jは、一人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来、4度にわたり延べ90名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は、確かな技術と経験を有する指導者（インストラクター）の統括のもとに、安全かつ確実を第1にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の習得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしております。

81年は、日本のヒマラヤ登山が初まって45周年にあたります。H A J登山学校はその発祥の地、ナンダ・コットで行なう予定です。

ナンダ・コットはインナー・ラインにあり、未

解禁のピークですが、H A Jの特別な活動により実現する見通しであります。渉外上、メンバーを早く確定させる必要がありますので、できるだけ早く申しこんで下さい。

目的 ①ナンダ・コット(6,861m)の登頂。

②ヒマラヤ登山の基礎習得

時期 1981年9月14日(日)～10月12日(日)

29日間(登山期間15日間)

負担金 69万円(航空運賃、他の変動によりスライド)

定員 隊員20名(申込順) インストラクター4名

申込み 1980年8月31日まで下記あて申込むこと
(詳しい資料を送ります。)

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル新館506 日本ヒマラヤ協会

表紙写真

バルンツェ(Baruntse 7,720m)

ホングコーラ・パンチボカリより(写真右側)

緒方 奎介

ヒマラヤ No.105

1. ヒマラヤ放談 ————— K.M.ヘルリヒコファー

3. ヒマラヤニュース <地域・新刊・トピックス>

6. 特集 ケダルナート 1980年H A J登山学校

11. NEFA 人と風土 ————— 沖 允人

17. カンチ通信No.6. No.7

18. 連載 遠征学入門⑮ ————— 清水 澄
ヒマラヤ閑話⑳ ————— 五百沢智也

22. 寄稿 セミナー・トレッキングに参加して ————— 由良 珠江

24. 事務局日誌

ヒマラヤ放談

今春カンチェンジュンガの偵察に向ったH A J 隊は、現地でヘルリヒコファー氏の率いる国際隊と遭遇、BCも隣りあって設営した。隊は早速表敬訪問し、これを機会にインタビューを試みることとなった。ヤルン谷の奥深く、カンチェンジュンガを真正面に見る高地（標高5,200メートル）での対話は、野性味も手伝って楽しいムードの中で行なわれた。今さら説明の必要もないほど世界的に有名なヒマラヤニストであるヘルリヒコファー氏は現在64才、あいかわらず精力的な活動を見せているが、さてその素顔は……。



K. M. ヘルリヒコファー

兄の死を機に山の世界へ…

—— お生まれはどちらですか？

ヘルリヒコファー ドイツのパバリア地方です。1916年生まれです。

—— 山登りは、いつ頃から始めたんですか？

ヘルリヒコファー 私の場合、若い頃はクライマーではなく、マウンテンワンダラーでしたよ。私の兄（ウィリー・メルクル）は優秀なクライマーでした。兄は1932年と34年にナンガ・パルバットに遠征しましたが、34年の遠征の時に稜線の高みで消息を断ってしまったのです。そういったことがキッカケとなって、私もやがて山に登るようになった。パバリア、ベルヒスガーデン、キングーマウンテンなどに登りました。

—— 最初の遠征は1953年のナンガパルバットでしたね。

ヘルリヒコファー そう、ヘルマン・ブールが登った時で、ラキオト氷河から行きました。あれはものすごく長いルートだった。兄の死んだルートです。7kmのラキオト氷河を登り、C₃に入って、そこから頂上までまだ7kmあった。登頂した後も非常に長い時間かかって帰って来たのです。

—— あれは歴史に残るドラマチックな登攀でしたね。

ヘルリヒコファー ええ、まったくです。それか

ら61年にはもうひとつのルート、ディアミールフランケに行きました。昔ママリーが試みた所です。この年は7,000メートルぐらいで帰って来ましたが、翌62年には成功しました。キンスホーファー、マンハルト、それにレーウが頂上に立ちましたが、でもレーウは帰って来なかった。

—— で、その後がルパール壁への挑戦となるわけですね。

ヘルリヒコファー そうです。ここはものすごい壁で手こずりました。何しろ4回も行きましたからね。（注：63年、64年、68年、70年）でも1970年の遠征でメスナー兄弟、フェリックス・クーペン、ペーター・ショルツが初登攀に成功しました。この時のギュンター・メスナーの遺品を、日本の遠征隊がディアミール側壁で見つけています。

（注：1976年福岡大学隊）

最高のルート、SEピラー

—— そうすると、通算でナンガ・パルバットに何回行かれたんですか？

ヘルリヒコファー その後も行ってるし、えーと9回ぐらいかな。

—— もう取り憑かれたようですね。何故そうまで頻繁にナンガ・パルバットに向かわれたのですか。何か特別な理由でも……？

ヘルリヒコファー ひとつは兄の死んだ山だから

です。それで最初にラキオトサイドから入ったんです。これに成功した後、私はK₂に行きたかった。ところが、1954年にA・デジオの隊が登ってしまった。次にヒドゥン・ピークを考えただけパーミッションを取得したのがひどく遅くなってしまって、出発までにお金と思うように集まらなかった。そこで、そんなにお金のかからないもっと近いピークを、と考えなおしたのです。ヒドゥン・ピークはあまりにも遠い。

—— ナンガ・パルバットなら近いですね。

ヘルリヒコファー そうです。そこで「同じピークで違うルートを」という発想になった。

—— ルパール壁の成功の後には、いろいろな山域で活躍なさってますね。

ヘルリヒコファー ナンガ・パルバットの後は東グリーンランドに行きました。72年だったかな。アルプスやピレネーにも出かけました。これもなかなか楽しいですよ。75年にはまたナンガ・パルバットに行って、ディアミールの谷に入り、楽しい日々を過ごしました。

—— ナンガ・パルバットでは、もう新ルートを開拓する気はないんですか？

ヘルリヒコファー 大いにある。サウススイストピラーですよ。

—— サウススイストピラーということ？

ヘルリヒコファー ルパール壁の隣です。すぐに行きたいところだけど、今はパキスタンがあまりいい状況でないようだ。

—— おもしろいルートなんですか？

ヘルリヒコファー ナンガ・パルバットで最高のルートでしょう。非常に困難です。

—— なるほど。今まで登った中では、どこが最も興味深かったですか？

ヘルリヒコファー やはり1970年のルパール壁です。クラシックルートは現代ではあまり良くない。あそこはあまりにも長すぎる。キンスホーフェールルートは悪くない。76年にはハンス・シェルがルートを開いてるけど、あれもなかなかいいルートです。

本当は南峰へ行きたかったが…

—— 今回のカンチェンジュンガ遠征は、どのよ

うな動機でお初めになったのですか？

ヘルリヒコファー 今、私にとってエヴェレストはあまり興味深い対象ではない。そこでカンチェンジュンガを考えた。でも本当は、主峰ではなく南峰へ行きたかった。ところが南峰ではパーミッションが取れない。また、あなたがたとは別のもうひとつの日本隊は、先に北面の許可を得ていた。そこでいろいろ考えたけど、第1案としては、グレートシェルフから主峰へダイレクトに登る新ルートを開拓するつもりでいる。あそこの正面に岩稜が見えますね。その右手に小さなクローアールが走っているでしょう。あそこを行こうと思う。もしそれが不可能なようなら、主峰と中央峰の間のクローアールを登って、そこから国境稜線づいに主峰に達するルートも考えている。

—— 今回、酸素は使いますか？

ヘルリヒコファー 60本用意してきました。

—— 今、隊の進行情況はどうですか？

ヘルリヒコファー 先端がC₂入りして、C₃へ向っています。ポーター問題等でキャラバンが遅れ、そのために登攀も予定より遅れていますが、まあ何とか行けるでしょう。

—— 成功を祈っています。

ヘルリヒコファー ありがとうございます。ところで、あなたがたの来年のトラバース計画はすばらしいじゃないですか。あれはベリービューティフルラインだ。ぜひ成功させて下さい。

—— がんばりたいと思います。日本へ帰ったらまた御連絡しますが、今後情報交換などよろしくお願ひしたいと思います。

今日はありがとうございました。御協力を感謝しています。（インタビュー構成 菊地薫・角田不二）
<注>このインタビューは、4月20日に行なわれたものです。この後、国際隊はルートをノーマルルート（55年英国ルート）に変更し、5月15日、隊員1名とシェルパ3名が登頂しました。なお、登頂者は北面に山学同志会の第1次アタック隊のトレースを見たと言っており、またこのパーティーのトレースも、同志会第2次アタック隊によって確認されています。同志会の大宮氏が頂上で国際隊の残したビスケットを頬張ったというエピソードも残っています。

地域ニュース

《インド》

インドを訪れた外国人

1977年度にインドを訪れたアメリカ人は74,531人・78年度は84,551人でイギリスに次いで第2位を占めた。月別にすると、最も多くのアメリカ人が訪れたのは10月である。一方フランスは8月西ドイツ人とイギリス人は12月が多い。アメリカ人は滞在期間は平均して27.5日、ヨーロッパ人25.7日、アジア人は31.1日で、年齢別にすると、アメリカ人は31-50才代が最も多く、性別には男性61.7%、女性38.3%である。1977年インドを訪れた外国人は640,422人であるが、78年には747,995人に増加した。

ダライ・ラマ訪中？

1959年インドへ亡命したダライ・ラマDalai Lamaは5月13日UN Iとの記者会見で、今年もしくは来年中国の指導者と会談のため中国を訪れるかも知れないと語った。昨年ダライラマの代表が北京とチベットのラサLhasaを訪れている。

マニプール州の政情不安

4月28日婦人1人が死亡したことに抗議してインパール(マニプール)で若者が騒ぎを起こし、軍隊が出動し、約150人が逮捕された。マニプール以外からの移民に対する反感を持つ学生指導者と関係があるといわれ、4月28日に2日間の外出禁止令が出された。暴徒は工場、住宅、車等に放火し、29日現在インパール近郊の部落では約2,500人が家を焼かれ、又5,000人以上が安全な場所に避難した。

5月4日にはトリプラ州都アガルタル附近の町で約50人の部族民が市場を襲い5人が殺された。5月18日にはマニプール州の一部に夜間外出禁止令が出された。シンR. K. D. Singh マニプール州首相の言によれば、外部からの攪乱分子の侵入を防ぐためであるという。

(日印協会報 1980. 6より転載)

《ネパール》

旅行・トレッキング代理店
に関する新規則

ネパール政府は5月27日、観光事業規則の一部を改定し、官報でもって公示した。その幾つかを紹介する。

- ① 旅行・トレッキングの代理店(エージェント)が外国人から得たトレッキング用品を売却・贈答する等の行為を禁止する。
- ② ポーター賃金は1日当り、標高3,700 m以下では21ルピー、3,700 m以上の山地では30ルピーとする。また、ポーターヘッドには同様30ルピー、45ルピーを支払うこと。
- ③ 山地(3,700 m以上)で雇用するポーターが死亡した時は10万ルピーの保険金を支払う義務を負うこと。(これは、その後25,000ルピーに引下げられたようである。)
- ④ 3,700 m以上では、ポーターにトレッキング用靴1足、ジャケット、ショール、手袋1足を最少限支給すること。

また、2,438 m以上の高地ではズック靴1足、ショールを支給すること。

(ライジング・ネパール紙から)

新刊図書一覧

- ① 渡辺建夫、「インド最後の王——ティーパー・スルタンの生涯——」, 晶文社, 1980・5, 303p, 1,600円。
- ② 雲南人民出版社・編, 「逃婚調・重逢調・生産調——僥族民間長詩三首——」, 昆明(中国雲南省), 雲南人民出版社, 1980・1, 182p, 四角八分=290円, (中国語。初版3440部)。
- ③ 小椋桂著/宮田雅之・切り絵, 「聞いたこともないシルクロード物語」, 日本放送出版協会, 1980・5, 165p+楽譜, 1,400円。
- ④ イブソン=ハルドゥーン著/森本公誠・訳, 「歴史序説・第二巻」, 岩波書店, 1980・5, ix+439p, 4,700円, (イスラーム古典叢書)。

- ⑤長沢和俊, 「探検学 — 未知の世界に挑んだ男たちの記録 —」, 大陸書房, 1980・6, 246 p, 1,300円。
- ⑥栗林一路, 「中年からの山歩き入門」, 山と溪谷社, 1980・6, 357 p, 1,000円。
- ⑦NHK取材班/井上靖, 「敦煌 — 砂漠の大画廊」, 日本放送出版協会, 1980・6, 242 p, 1,500円, (シルクロード=絲綢之路, 第二巻)。
- ⑧常書鴻他著, 「敦煌の美術 — 莫高窟の壁画, 塑像 —」, 大日本絵画, 1980・ , 178 p, (A4変型版), 3,200円。
- ⑨緒方靖夫, 「激動のアフガニスタンに行く」, 新日本出版社, 1980・6, 243 p, 800円。
- ⑩熊谷樞, 「画集 — ヒマラヤの山と人 —」, 鎌倉書房, 1980・6, 223 p, 1,200円。
- ⑪クシワント・シン著/斎藤昭俊・訳, 「インドのシク教」, 国書刊行会, 1980・ , 230 p, 2,500円。
- ⑫木ノ切恒雄, 「蒼氓の詩 — イスラム —」, サンケイ出版, 1980・6, 83p, 3,800円。(写真集)。
- ⑬ヘディン/西義之・訳, 「シルクロード」, 白水社, 1980・6, 304 p, 1,600円, (新装版)。
- ⑭ヘディン/関楠生・訳, 「さまよえる湖」, 白水社, 1980・6, 317 p, 1,600円, (新装版)。
- ⑮ヘディン/宮原朗・訳, 「戦乱の西域に行く」, 白水社, 1980・6, 283 p, 1,600円, (新装版)。
- ⑯吉田実, 「モンゴル」, 古今書院, 1980・6, 258 p, 1,300円, (リージョナルブックス)。
- ⑰中村芳男, 「丹沢山暮らし」, どうぶつ社, 1980・6, 260 p, 980円。
- ⑱横山厚夫, 「幾つかの山」, 朝日新聞社, 1980・6, 238 P, 1,200円。
- ⑲ジョージ・オーウェル著/宮本靖介・土井一宏・訳, 「ビルマの日」, 音羽書房, 1980・5, 346 p, 2,000円。
- ⑳菅沼晃, 「サンスクリットの基礎と実践」, 平河出版社, 1980・5, 287 p + 23p, 2,500円。
- ㉑中村元・訳, 「ブッダ最後の旅 — 大パリニッパト経 —」, 岩波書店, 1980・6, 326 p, 500円, (岩波文庫325-1)。

トピックス

秋のヒマラヤ集会 9.21~23 〈トレッキング・セミナー〉

今年も富士山で恒例の秋のヒマラヤ集会を開催いたします。

このころの富士は、夏のにぎわいも遠く去ってカラマツの黄葉が見事な静かな山です。散策もよし、登頂もよし、どうぞ家族連れで気軽に参加してください。トレッキングセミナーもあわせて行ないます。

- と き 昭和55年9月21日(日)~23日(火)
(秋分の日)
- と ころ 富士山(5合目佐藤小屋をベース)
- 日 程
 - 9月21日(日) 14時まで佐藤小屋集合。
 - ・オリエンテーション(14時~15時)
 - ・トレッキングの楽しさ(15時~18時、ヒマラヤ各地域のトレッキングスライド)
 - ・懇 談 会 (19時~21時)
 - 9月22日(月) 5時起床
 - ・Aパーティ……富士登山(頂上往復)
 - ・Bパーティ……お中道めぐり・自然観察(講習)
 - ・座 学 ヒマラヤトレッキングのハウ・ツウ(17時~20時)
 - 9月23日(火)
 - ・座 学 HAJトレッキングセミナーについて。(8時~12時)
 - ・解 散 13時
- 会 費 7,000円(宿泊・食費・懇談会費を含む)
- 申し込み 8月31日までHAJ事務局へ申し込んでください。(先着40名)
- その他
 - (1) シュラフは必要ありません。秋山装備持参。行動食・共通装備は準備します。

東京7月定例集会—7.31

(兼ビール・パーティー)

7月定例集会は、機関紙の発行が少し遅れることに合わせて月末になりました。

今月は、酷暑の折から冷たい飲物も混じえて語り合いたいと思いますので多数御出席ください。

と き 7月31日(木) 午後6時30分～

ところ HAJルーム(Tel 03-367-8521)

テーマ カトマンズのこの頃(ネパールから帰国したばかりの角田、菊地両会員を囲んで肩のこらないお話を伺うことにします。)

会 費 1,000円(ビール代込み)

インド・ヒマラヤ登山規則等

コピー・サービス一部300円

一部改訂になった登山規則・無線機申請書等一セットを準備しています。

コピー代実費・送料共 300円ですので、事務局へ申し込んでください。A4判11枚です。

ビスタリ・クラブ例会(第9回)

8月23日から27日までの4泊5日で、第9回のビスタリ・クラブの例会をハケ岳縦走(小淵沢駅—編笠山—権現岳—赤岳—美濃戸—茅野駅)で開催の予定。参加希望者は下記まで連絡下さい。

松本正城氏 山森美智子氏(事務局員) 退職—ごくろうさまでした。

去る3月1日からHAJ事務局員として、山森欣一事務局長のカンチ偵察の留守をあづかっていた松本正城氏が6月30日付で退職されました。山森事務局長帰国にともなうものです。

また、同じく山森美智子氏も同日付で退職され、代って角田不二氏(会員)が当面事務局員として働いていただく予定です。(常勤)

退職されたおふたりには短かい期間でしたが、なれない仕事をけんめいに処理していただきありがとうございました。

急 告

インド・ヒマラヤ研究会を 延期します。

かねてより予告しておりました、インド登山財団総裁 H.C.サリーン氏を迎えてのインド・ヒマラヤ研究会は、サリーン氏の公務上の御都合により延期することに決定いたしました。

氏は、中央政府から派遣されてグジャラット州政府に出向しておりましたが、このほど、アッサム州への出向が濃厚視されるようになったことで日程に変更を生じたものです。

このほど氏と会見した菊地評議員からの連絡では、10月下旬頃になるもようとのことですが、詳しい日程については確定次第会報にてお知らせいたします。

なお、種々準備を進めてこられた各地区担当者にはごめいわくをおかけしておりますが、再度よろしく願いいたします。

開かれる秘境ムスタン 踏査隊々員募集

先月号の折込みでお知らせしましたように、永い間外国人の入域を拒んできたムスタン王国(ネパール)への道が開かれることになりました。

HAJは、この興味ある地へ踏査隊を送るべく準備を進めております。

人員は10名と極めて限定されますが、まだ若干の余裕がありますので至急御連絡をお願いします。

時期は、8月20日頃より約50日間です。」

日程・経費等詳しいことは事務局までお問合わせください。

ガンゴトリの秀峰

ケダルナート(6,940 m)へ

1980年H A J ヒマラヤ登山学校

9.13~10.11(29日間)

1978年のヌン(7,135 m)に始まったヒマラヤ登山学校は今年で第4回目を迎え、22名の隊員(インストラクター4名を含む)がガンゴトリの秀峰ケダルナート(Kedarnath 6,940 m)に向うことになった。

ケダルナートはガンゴトリ氷河の左岸にあり、聖地ケダルナートの頭上にそびえる白く巨大な山である。

日本を出てから帰るまでわずか29日間という短期間で7,000 mになんなんとする高度を獲得することは決して容易なことではない。第1回以来、安全を旨としながらも果敢なタクティクスを実践してきた登山学校隊の伝統を受けついで、全員が満足の行く山行となるよう祈念するものである。

3月以来、何回かにわたるミーティング・合宿を重ね、実務準備を進め、6月末には低圧室で6,000 m以上の環境を体験してきた。

その成果がどう結実するか注目したい。

登山学校の趣旨

H A Jは創立以来、ヒマラヤ諸国との友好親善・相互理解をモットーに、登山・学術・その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開しております。1977年から1981年の5年間にわたって実施する、「ヒマラヤ登山学校」もその一環であります。

御承知のように、ヒマラヤは地球上で最も高い

山岳地域であり、そこでの登山活動は高所という低酸素条件下で行われるため、複雑でしかも困難な要素を含んでおります。また、登山許可の取得や、通関を始めとする種々の手続き、渉外など登山以前に処理しなければならない多くの仕事があります。

然し、ヒマラヤの素晴らしさにふれ、その国と人とを理解することは意義あることであり、一人でも多くの人間にヒマラヤ登山を体験させようというのがH A Jのめざすところであります。

この「ヒマラヤ登山学校」は、確かな技術と経験を有する指導者(インストラクター)の統括のもとに安全かつ確実を第一義として、必要とされる諸準備をすすめ国内での学習を行ない、ヒマラヤの高所を経験し、ヒマラヤ登山の基礎と実際を経験しようとするヒマラヤ登山のガイドンス・システムであります。そして、さらに大きなヒマラヤ計画を進めて行ける人を育てることも目的としております。

諸外国には、国家の援助のもとに活動しているこの種の学校がありますが、我が国では極めてユニークなものであります。

第一回は、1977年秋ガルワール、タルコット峰(6,099 m)で日本山岳会に協賛しておこない、第二回は1978年夏、カシミール、ヌン峰(7,135 m)、第三回は1978年秋、ガルワール、トリスル峰(7,120 m)、第四回は1979年秋、キャシード

ラル峰(6,400 m)と続いており、いずれも成果をあげてきております。

実行・推進の体制

日本ヒマラヤ協会登山学校委員会

会 長 柴田金之助 委員長 山倉洋一
委 員 佐々木正 内田嘉弘 南勲 尾形好雄

日本ヒマラヤ協会ヒマラヤ登山学校事務局

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

☎(03) 367-8521

登山隊の名称・構成

1. 名 称 1980年日本ヒマラヤ協会インドヒマラヤ登山隊HAJ GANGOTRI HIMALAYA EXPEDITION 1980

(略称 HGE 80)

2. メンバー

隊 長	内 田 嘉 弘 (43. 京都)
副 隊 長	南 勲 (37. 大阪)
インストラクター	尾 形 好 雄 (31. 東京)
隊 員	遠 藤 喜重郎 (33. 東京)
"	木 村 陽 子 (25. 鳥取)
"	藤 岡 明 生 (23. 神奈川)
"	宇佐美 博 康 (30. 岐阜)
"	大 野 広 美 (37. 東京)
"	村 上 豊 子 (23. 北海道)
"	高 瀬 敏 久 (29. 東京)
"	斎 藤 光 明 (23. 東京)
"	熊 谷 洋 (24. 宮城)
"	野 畑 浩 之 (27. 東京)
"	新 郷 信 広 (36. 佐賀)
"	北 出 昭 彦 (22. 大阪)
"	関 久 雄 (29. 神奈川)
"	菊 池 春 枝 (29. 茨城)
"	山 形 正 己 (25. 栃木)
"	丸 誠一郎 (25. 東京)
"	飯 田 徳 治 (34. 東京)
"	好 井 覚 (29. 大阪)

登山計画概要

1. 目標の地域・山



ケダルナート (6,940m)

インド・ヒマラヤ, ガンゴトリ氷河
ケダルナート (6,940 m)

2. 目 的

- (1) 6,000 m 峰の短期間の登頂。
- (2) ヒマラヤ登山実践の基本を習得する。
- (3) 高地住民の民俗学, 環境学に関する学術調査。

3. 時 期

1980 年 9 月～10 月

4. 日 程

9 月 4 日 先発隊 2 名、日本出発。
9 月 13 日 本隊 日本出発、ニューデリー着。
9 月 14 日 デリー発→15 日 ウッタルカシ。
9 月 18 日 ガンゴトリ氷河、タポバン附近の BC へむかう。
9 月 20 日 BC 着) 登山期間約 14 日間。
10 月 4 日 BC 発
10 月 8 日 デリー帰着。
10 月 10 日 本隊ニューデリー発、日本帰着 10 月 11 日午後。

◎現地連絡先

c/o COX & KINGS (Agents) Ltd.
Post Box 134 Indra Palace, Connaught Circus.

New Delhi 110001

Tel: (New Delhi) 321428 Cable
COXSHIP

5. 総経費

1,300 万円

6. ケダルナート(Kedarnath 6,940 m)について
ガルワールの中心地、ウツタルカシから車でバギラティ河に沿って北上すると2日のドライブでヒンズー教の聖地、ガンゴトリに着く。ここからさらに1日程さかのぼるとガンガ(ガンジス河)の源流であるガンゴトリ氷河の舌端が現われる。

このガンゴトリ氷河は、海拔 4,000 m 附近を末端高度として、その幅 6~8 km、長さ約 25 km の長大な氷河を形成している。周辺には盟主チャウカンバやサトパントなどの 7,000 m 峰をはじめに 200 座近くの 6,000 m 峰が聳立し、将にヒマラヤの未登峰の宝庫をなしている。

ケダルナートはガンゴトリ氷河(約 32 km)の入口の支氷河 Kirti Bamak に入った所にあり、古くから名られた名山である。ケダルナートは 2 つのピークがあり、ケダルナート本峰と北東にあるケダルナート・ドーム(Kedarnat Dome 6,831 m)から成り立っている。

初登頂は 1947 年、スイス隊(アンドレ・ロック隊長)によって、6 月 25 日にケダルナート・ドームに初登頂、続いて本峰をねらったが、ナイフリッジを通過中に、隊員とシェルパの 2 名が

滑落し負傷した為に、登頂はあきらめて BC に戻った。体制を整え 7 月 10 日にドーム頂上を越えてロック隊長ら 3 名とシェルパのテンジン・ノルゲイがケダルナートに初登頂した。テンジンにとっては、カプルーに次いで 2 つ目の登頂となった。

その後、ガンゴトリ地域は第 2 次世界大戦のために、インド隊が独占することとなった。

1967 年にはインド隊がドーム第 2 登。

同年、ITBP 隊がドーム第 3 登。

1974 年には ITBP 隊が北の氷河よりケダルナート第 2 登。

同年秋にカル Катタ 女性教師隊が本峰第 3 登。

1975 年秋、Indian Ladies Exp がドーム第 4 登。

1978 年 IAF がドーム第 5 登。

同年、ITBP 隊がドーム第 6 登と本峰第 4 登
そして今年はずでに日本山岳会女性隊がドーム(5 月 31 日)にドーム第 7 登を成しとげた。

今回の登山学校では、北西稜からドーム経由でケダルナートをねらうもので、初登頂と同じコースを行くことになる。

ヒマラヤ経験の少ない隊員が多いが、前 2 回の登山学校の経験を踏まえ、ドーム頂上へは全員登頂、元気な者はケダルナート本峰へと計画しており、5 月の連休は富士山合宿、6 月 28 日は立川自衛隊の航空医学実験室にて 6,000 m までの低圧実験も経験し、全員ケダルナートに向っております。

基本戦略

1. 目標

- 1) ケダルナート(6,940 m)に可能な限り多くのメンバーを登頂させる。
- 2) ケダルナート・ドーム(6,830 m)の全員登頂を目指す。
- 3) ガンゴトリ氷河周辺の踏査。

2. 登山行動

- 1) 上記目標に対して登山期間を四期に分けて登山活動を行なう。

— 第一期 —

先発隊に依る BC 建設と下部キャンプの選定及びルート工作。

A BC 建設と本隊受入れ準備。

カンチ隊に御協力を!!

昨今のネパールではシェルパ・ポーターへの支給品が大きな数量を必要とするようになっており、カンチェンジュンガ隊も苦慮しております。使わなくなったり、押入の隅に入っている登山用具・衣類等をお持ちの方、カンチ隊へ御寄贈いただけたら幸いです。よろしく願い申し上げます。

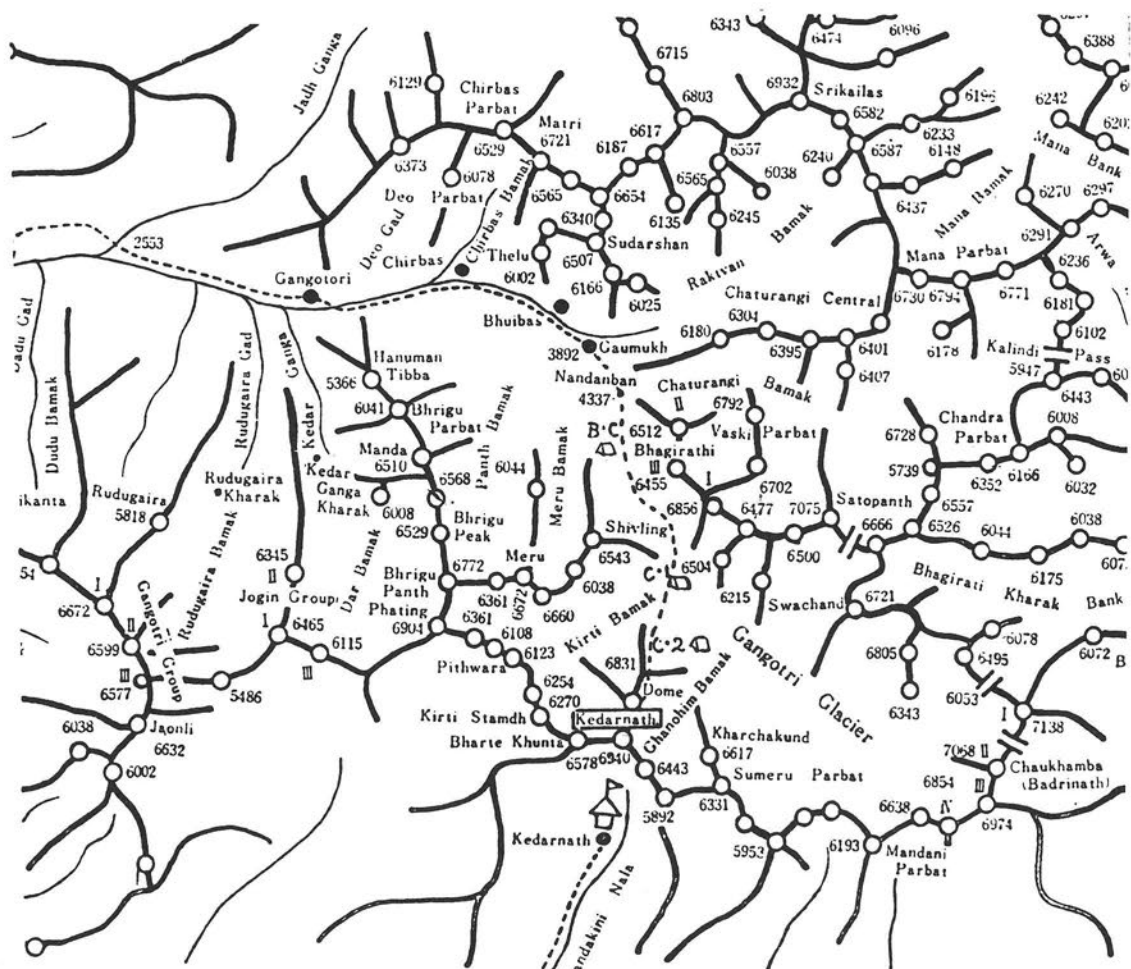
《連絡先》

H A J 事務局

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1

淀橋食糧ビル 506 号

※例えば…山靴、キャラバンシューズ、ニッカーズボン、ポンチョ、ヤッケ、オーバー手袋、毛の手袋、靴下、etc ……。



この第一期は、ガンゴトリ氷河、タポバン
附近（4,320 m）にBCを建設。隊員の高度
順化（4,300 m位までの）を行ないながら隊
荷の集荷及び偵察活動を行なう。

この第一期登山期間における隊員の高度順
化問題が短期速攻形式に依るポーラ・メソッ
ドを展開しようとする本登山計画の遂行上、
重要なポイントと予想される。

— 第二期 —

6,300 m附近までの高度順化とアタック・
キャンプ（C₂）の建設。

この第二期は、第一期の進行、偵察活動よ
り順次ハイ・キャンプの建設を行ない、頂上
アタックの登頂態勢を整える。

— 第三期 —

ケダルナート及びケダルナート・ドームの
登頂。

対象は、ケダルナート（6,940 m）と順化

不調者に依るケダルナート・ドーム（6,830 m）。

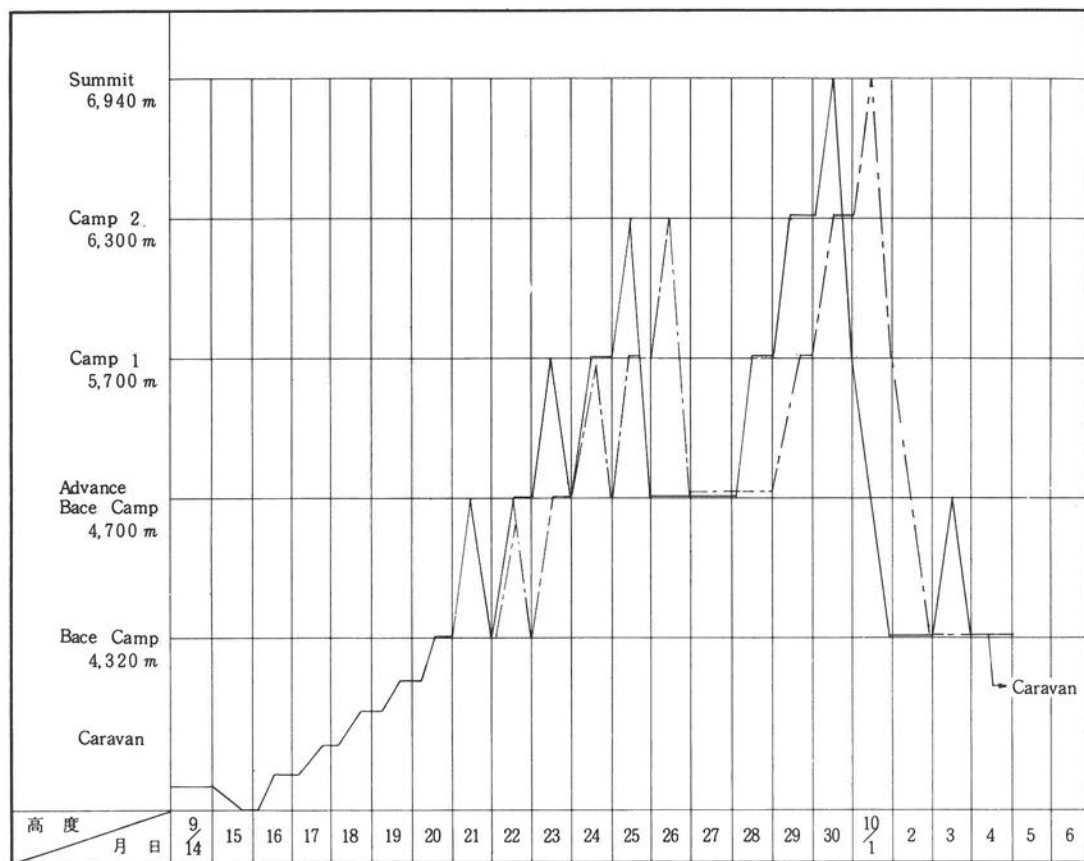
— 第四期 —

撤収、下山。往路をガンゴトリへ下る。

ヒマラヤで比較的天候の安定する9月下旬
から10月上旬までのポスト・モンスーン期に
登山活動を行ない、わずか13日間と言う短期
間で登頂を果たす。そのためには、第一期、
第二期における各隊員の高度順化が大きなフ
ァクターとなるであろう。（先発隊の任務は
かなり重要になる。）

- 2) 隊を3パーティに分け、各パーティにパー
ティ・リーダーを置き登攀行動の核とする。
各パーティをローテーション1単位とする。
- 3) 第三期のアタックに当っては、第二期ま
での順化程度を観察してパーティの再編成を行
なってアタックを実施する。
- 4) 各パーティは、日差行動を原則とする。
- 5) 高所ポーター2名を積極的に使用すること

<隊員行動表>



に依り、隊員の負荷を軽減し、初期順化のスムーズ化を計る。

3. ポーラ・メソッド

- 1) 前進キャンプは、ケダルナート・ドームから派生する北西稜上に Camp 2 まで予定している。

2) 各キャンプの位置

Camp 名	高 度	位 置	Camp 高度差
B・C	4,320 m	ガンゴトリ氷河、タポバン附近	
A・B・C	4,700 m	Kirti Bamak Glacier 上	380 m
C・1	5,700 m	ケダルナート・ドーム北西稜上	1,000 m
C・2	6,300 m	ケダルナート・ドーム直下	600 m

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より応募したものを、毎月一作づつ掲載する予定であります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

《規 定》

- (1)モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。
- (3)未発表であること。

- (4)なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見うけられるような写真（例：カラパタからのエベレスト）などは御遠慮下さい。

NEFA 人と風土

「Assam Mountaineering Association 1971」より

T.P.Khoand

訳：沖 允人

西をブータン、北と北東をチベットと中国の新
疆、南東をビルマに囲まれた NEFA (North East
Frontier Agency 訳注：1971年からはアルナ・チ
ャル・プラデシュ州となっている) はカーメン (Kamen)、スバンシリ (Subansiri)、シアン (Si
an)、ロヒット (Lohit)、ティラップ (Tirap) の
5つの行政区からなっている。83,578km²の広さと
467,511人 (注：1971年現在) の人口をもつ NE
FA は、“活気のある”土地である。主な種族だ
けで22もあるといわれる多種族の住む土地であ
り、各種族はさらに沢山の種族に分れ、異った文
化、変った習慣をもっている。一般的に言えば NE
FA の種族社会は、父系の社会である。

ある種族の人たちは種族同志で結婚する。NE
FA の人たちはおどろくほどビジネスライクであ
る。正直で純朴な性質をもっており、親切でもあ
る。性格の清らかさは彼らの中に美を愛する心を
芽生させている。繊細な審美眼、良い物を作りた
いという意欲をもっている。豊かな民族ダンスを
し、楽しく歌い、苦勞があっても涙を出さない人
たちである。

インドの北東地域は、有史前はマハカントラ (Mahakantara) という名前であった。のちにはダ
ルマランヤ (Dharmaranya) と呼ばれた。これは
ベーダー、ラマヤナ、マハバラター (Veda Ra
mayana Mahabharata) やその他のインドの聖典 (Puranas) に示されている。さらにあとになって、
北部の丘や溪谷も含め、カマルパ (Kamarupa)

と呼ばれるようになった。この地区には古代の寺
院の遺跡があり、各地には城壁が散在している。
これらは NEFA と他の国との1世紀にわたる関
係を物語るものである。カメンのパハルクプン
(Bhalukpung) の村にあるいくつかの遺跡も NE
FA と昔のインドとの間に友好関係があったとい
う一つの証拠となっている。

この地域に住む種族の人類学的解明は興味深い
テーマである。歴史学者、言語学者、民族学者は、
インド文明の基礎は、約3,000年ほど前のオース
トリア、ドラビダ、モンゴロイド、アーリアンな
どの異なった文化の融合にあったといっている。
モンゴロイドの人たちはインドの北東丘陵部に住
んでいて、インド人の一つの大きな流れになって
いた。このモンゴロイド人はキラタス (Kiratas)
と呼ばれた。この偉大な言葉はアタルバ・ベーダ
(Atharva Veda) などの聖典の中にある。マハバ
ラーターはキラタスの男と女としてマハデブ (Ma
hadeva) の神とその配偶者を示しており、聖典ラ
マヤナ (Ramayana) の中に記されている。このキ
ラタス族の人たちはインドの北東部に住んでいて、
祖先はインド系モンゴロイドであるといわれてい
る。

広大なインドの北東部の辺境に住んでいる機敏
な人たちは自然の同化作用の過程によく適応して
いる。同時にまた、彼ら自身の文化・生活・伝統
もよく残し、さらに発展させている。そして、イ
ンドの歴史と文化に価値ある貢献をしている。

＜カメン地区 (Kamen)＞

熱帯と亜熱帯の森に囲まれているカメン地区はNEFA西部一帯の地域をしめており、西はビルマ、北はチベットの国境に接している。この地区の中心地ボンディラ (Bomdila)は標高約2,700 mあり、インドで最も高地にある行政中心地の一つである。面積は約13,724 km²である。カメン地区は標高約3,000 mの平原にあり、まわりは高い山に囲まれている。ほぼ350年前からあるタワン (Tawang) という有名な仏教のお寺がある。

○モンパス族 (Monpas)

カメン地区にはモンパ、シェルドックペン、ミジ、アカ、コーワ、ダフラ (バンニ)、スルン (Sherdukpen, Miji, Aka, Khowa, Dafla (Bangni), Sulung) らの種族が住んでいる。モンパの居住地はカメン地区の西部である。彼らは単純でやさしく、思いやりがあり、ユーモアがあり、強壮な風貌をしており、道徳的にもしっかりしている。静かで友好的で高度な文化を保っている。モンパ族はマハヤナ派 (Mahayana) の仏教徒であるといわれている。

○シェルドクペン族

シェルドクペン族は主としてカメンの南部のルパ (Rupa) とシェルガオン (Shergaon) の2つの村に住む少数民族である。

この種族はさらにトング (Tongs) とゲオ (Gheos) の2つの種族に分けられる。シェルドクペン族は農業従事者として秀れているが、商業もうまい。宗教は仏教と土俗信仰の混った興味深いものである。

○ミジ族

ミジ族は自分たちをダマイ族 (Dhammai) と呼んでいる。顔型と生活様式は、ときに種族間で結婚するアカ族、またはフルソ (Hrussos) 族と少し違ったところがある。男も女も髪を長くしている。男はその髪を民族的なひもで結び、女はそのままにしている。

○スルン族

スルン族は東部カメン地区の高地に住んでいる。この種族は高地民族の中では最も古い種族といわれている。通常は狩をして暮しているが、スパン

シリ (Subansiri) の町ではナイフや真鍮細工のうまい有能なかじ屋をしている。

○アカ族

フルソ族は一般にはアカ族と呼ばれている。“アカ”とは“色を塗る”という意味で、彼らが黒いマークで顔を塗るという習慣をもっているところからきている。アカ族は歴史上の記録によくでく。平和で進歩的で協調的な人たちである。

低地のベルト帯地域に住む一部の人たちはバアイシャネィティブ族 (Vaishnavite) と呼ばれる。彼らは、農業が重要な職業である。商業にも才能を示し、ときにはミジ族と他の近隣の種族の中買人の仕事もしている。

○コーワ族

コーワ族、別名ブーガン (Bugun) はシェルドクペン族の住む村に隣接した7つの村に住んでいる。異族間結婚をする種族である。豚、牛、羊、鶏などをいけにえにする種々の祈りをおこなう。精神的には仏教にも影響を受けている。

○ダフラ族

ダフラ族、別名ダンニ族は異族間結婚をした数種族に分けられる。ダフラ族は穀物や日用品のためにはアパンス族にたよっている。ダフラ族は織物と陶器を作っている。竹と、きびですばらしい帽子を作る。髪は長くたらし、木の繊維でひだのすぐ上のところでしばっている。腰のまわりをタマ (Tama) と呼ぶきびを複雑にあんだひもで結んでいる。彼らは主にトラを殺したあとでおどろ一種類だけのダンスを伝統としている。

＜スパンシリ地区＞

スパンシリ地区は約14,797 km²の面積がある。密林におおわれた丘と谷はアッサムの平原からチベット国境まではてしなく続いている。丘の一部は約6,000 mの高さまで続き、一年中雪のあるところとなっている。この地区の特長はすべてを丘陵地に囲まれた水平な谷であり、そこにはこの地区の行政中心地ジロ (Ziro) がある。

スパンシリ地区にはアパタニ、ダフラ、タギン、高地ミリ (Apatani, Dafla, Tagin, Hill Miri) の各種族が住んでいる。

○アパタニ族

アパタニ族は行政中心地のまわりのスパンシリ地区の中心をなす平原に住んでいる。密集した村落に住んでいる。ほっそりとして背が高く、面長で、上品に曲った細い鼻をもち、顔立ちのよい人たちである。豚、あひるなどを飼っている。

田んぼを耕作し、稲をそだて、キビを沢山作る。段々畑として所有している土地のほとんどを生産のために利用している。主食は米である。他のNEFAの種族とちがい、アパタニ族の経済は安定している。織工としてもすぐれている。

○タギン族

シピ川(Sipi)の北の岸に沿ってタギン族の土地は広がっている。彼らの村が山で日陰になったところにあるので、モヤ族(Moyas)としても知られている。農業に主として従事している。狩や魚とりなども補助的な職業である。ドニイ・ポロ(Donyi・polo)を最大とする多くの神々を信じている。

<シアン地区>

広さ23,723km²、121,936人の人口をもつシアン地区はNEFAのもっとも活気のある魅惑的なところである。おどりと歌に熱心で、すばらしい織物のできる土地でもある。

この地区のほとんどが密林でおおわれている。場所によって標高が違うので、気候も大変変化に富んでいる。北方地帯の標高は4,600 mまで高くなっている。

シアン地区の種族はアディ族(Adi)と呼ばれる種族で代表される。この種族はさらに分けられ、ボグム、ボミ、ガロン、トゥイン地区のカンバ、そして、メチュカ、ゲリン、タギンの一族から構成される。(Bogums, Bomis, Gallongs, Khambas of the Tuling, Mechuka, Gelling, Tagins)

○ミヨン族とパダム族(Minyongs and Padams)

この地区の東と南東部に住んでいるアディ族は大きくミヨン族とパダム族の2つに分けることができる。この2つの種族はさらに小さい種族に分けることができる。

ミヨン族とパダム族は背が低く頑丈な体つきをしており、顔はかっ色で、真直な黒い髪をしており、耳の上の6 cmほどのところにきちんと巻きつ

けている。彼らは異族間結婚をする。一妻多夫は知られていないが、一夫多妻はおこなわれている。アディ族のダンスは大変ポピュラーである。ポヌルグ(Ponurg)という民族舞踊は半宗教的な性格をもっており、ミリ(Miri)と呼ばれるリーダーによって導かれる。

○ガロン族

アディ族の社会生活は民主的である。社会的行事の日などのとり決めるような行政、耕作地の選定、家庭のいざこざなどは村の長老“ガム”(Gams)の裁定により、通常はケバン(Kebang)と呼ばれる会議にゆだねられる。

ガロン族は基本的には農業従事者であり、多毛作農業をする。魚業もおこなう。すぐれた狩人は単独またはグループで狩に出掛ける。ひまなときにはいろいろな種類のあみかごを作る。

ガロン族はいくつかの小さいグループに分けられる。結婚の目的のために彼らは2つの厳格なグループ、ニジ(Niji)とニラ(Nira)に分かれている。この2つの部族同志の結婚は禁止されている。

ガロン族は大変芸術的な織物を作り、その一番立派なものは、中心に黒の織り糸をもち白と黒の一定のデザインであまれた美しいスカートである。ガロン族の政治的な組織は単純である。単一の氏族システムが彼らの政治組織である。

○カンバ族

トゥティン地方の国境沿いにカンバ族はすんでおり、タウン(Tawang)のモンバ族に大変似ている。精神的にはカンバ族は仏教徒であり、村には美しいブツダの像のあるお寺がある。彼らはダンスを好み、伝統的なダンスを見せてくれる。農業活動が極めて一般的である。多毛作農業は普及している耕作のパターンである。

○メンバ族

メンバ族はシアン(Sian)地区の北の境界に沿って住んでいる。彼らは信仰深い仏教徒である。精神的に、文化的に、経済的にカンバ族の同族である。段々畑ももっていていろいろな耕作をし、ヤクを使って畑を耕す。穀物や野菜の他に綿もそだてている。

○タギン族

村の全体や宗教的集団を統制する選ばれた議会や一般に認められた種族の長として世襲の酋長の地位といったものは存在しない。

タギン族の社会では女性の社会活動がかなり自由である。同一氏族間結婚が普通であり、異種族間の結婚はめずらしいことである。

タギン族の経済の構造は農業といろいろな日用品の商売である。

<ティラップ地区>

この地区はコーンサ (Khonsa) に行政中心地があり、この地区を流れる重要な川である“ティラップ”という川から名前がとられている。

ティラップは7,830 ㎢ほどの広さがあり、ラクヒンプール地区、ロヒット地区、ビルマに囲まれていて恐ろしく大きいパトカイ (Patkai) 山脈で区別されている。この山脈の山麓には平原があり、丘陵部はパトカイバムにだんだん高くなっている。標高は平原部の 170 m からダファブム (Daphabum) の約 5,000 m まで変化している。亜熱帯の常緑樹が多く、植物も多種である。

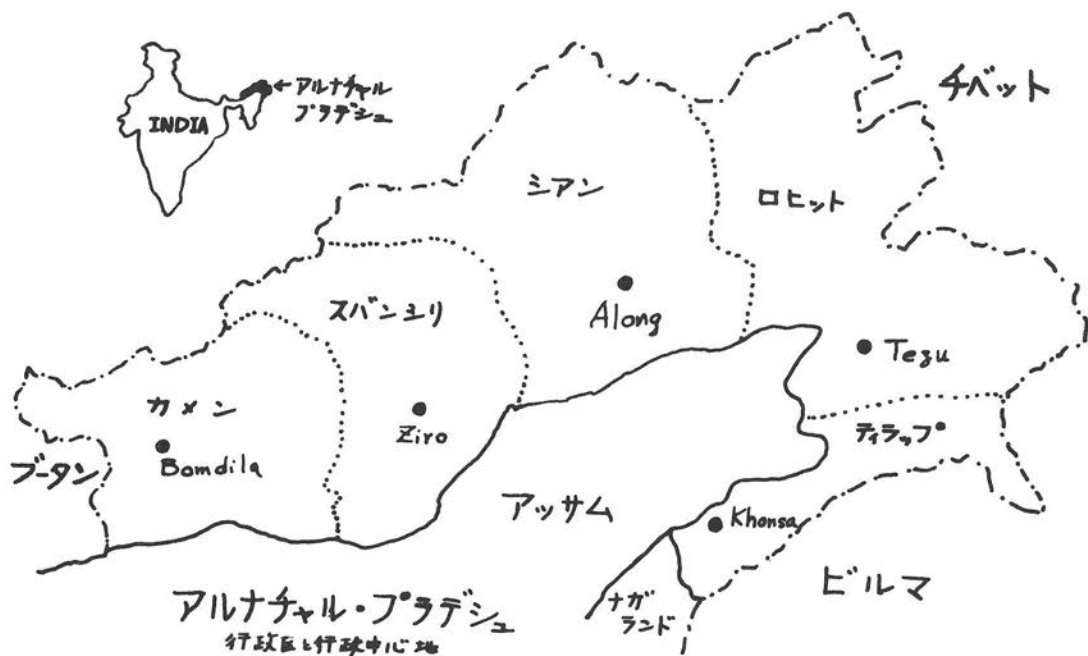
ティラップ地区にはワンチョ (Wanchos)、ノクテ (Noctes)、タンサ (Tangsas) 族が住んでいる。

○ワンチョ族

ワンチョ族はティラップ地区のナガランドとの境になる南西部に住んでいる。彼らの社会は4つのクラスに分けられる。すなわち、ワンハム (Wanghams) という主たる族、ワンパン (Wangpans) という普通の族、ワンハムの父とワンパンの母から生まれたワンシャ (Wangshes)、ワンチャの父とワンパンの母の子供であるワリサ (Warysus) の3つの種族に分れる。

これらの種族の社会的な差別は厳しいものであり、ワンハム族は社会生活のどの分野でも特別な扱いを受ける。すべての種族はワンハムに支配される約40の連盟に分けられる。

ワンチョ族は飾りのついたヘアーバンドをし、首、腕、足、耳に重いかざりをしている。ワンチョ族の男は顔や目のまわりにどぎつい入れ墨をし、首、のど、ほほ、腕、背中、腹に精巧なデザインの入れ墨をしている。女はへそに十文字のしるしをつけ、胸の間にネックレスをたらし、肩から精巧な飾り物を下げ、ももには点々をつけている。女性はその特徴ともいえるべき織物の能力をもち、良い織物を作る。ワンチョ族は木彫の名人でもある。ダンスもうまい。伝統的な戦いのダンスは色どりあざやかで、大変恐ろしいものである。



○ノクテ族

ノクテ族はワンチョ族の北方のティラップ地区の中央部に住んでいる。この種族の人たちは近くの平原部の人たちと昔からつながりをもっていた。彼らは服の一部のようにきびのバンドをし、腕と足には竹の皮をまいている。頭の前部をそりおとし、えり首の上でたばにして王冠のように髪をむすんでいる。首狩りに関係している特別なデザインの入れ墨が一般的である。

大麦の植え付けが水稲耕作の裏作としておこなわれている。ベテルの葉は商売として耕作されている。近くの泉からの製塩はこの土地固有の産業である。(訳注：嗜みタバコ的一种)

○タンサ族

タンサ族はランチャン (Lungchang)、モクロン (Moklong)、ユグリ (Yugli)、ルングリ (Lungri)、ハヴィ (Havi)、モション (Moshong)、ルンダ (Rundra)、ティカーク (Tikhak)、ポンタイ (Ponthai)、ロンピ (Longphi) の種族からなっている。各種族はさらに沢山の異族間結婚の派閥に分かれる。これらの種族はインド、ブータン国境に沿ったティラップ地区の中央部の東側に住んでいる。

男はルンギ、シャツ、ターバンを身につけ、女は足くびから胸まで身体に布切れをまきつけ、ブラウスを着、一種のターバンをまいている。女は織物が上手である。ある種族は自分たちで綿をとり、自分たちが使うための布を織っている。

<ロヒット地区>

ロヒット地区はテズ (Tezu) を行政中心地とし、 $2.59 \times 9,058 \text{ km}^2$ を少しこえる地区をカバーしていて、NEFA の一番大きい地区である。北は中国のマクマホンラインが境で、東はセセリ川 (Seseri) に沿いビルマのシャン州となり、南はアッサムのラクンプール (Lakimpur) とティラップ地区になっている。

ロヒット川は東部チベットから流れ出てヒンズー教の有名な巡礼地であるプラムラム・クンドに流れ込むロヒット地区という名前のいわれとなった主要な川である。

ロヒット谷の標高は $600 \sim 5,200 \text{ m}$ の間にあり、

標高が高いので、大変寒く、1年のほとんどを雪におおわれた大きな土地がある。ディバン (Dibang) 谷は多分 NEFA の中でもっとも難しい地形であろう。ここは気候条件にめぐまれ、めずらしい植物にめぐまれた土地となった。数多くの種類の樹木があり、それらのうちのあるものは大変良い材木になる。

ロヒット地区に住んでいる種族はミシュミ、カムプティ、シンポー族である。ミシュミ族にはイドゥ (Idu) またはチュリカタ (Chulikata)、ミジュ (Miju) またはカーメン、そして、ディガルーまたはタラホンの3つの主な種族がある。

○イドウ族

平原の人々からはチュリカタ族と呼ばれているイドゥ族は、ロヒット地区の西部のディバン (Dibang) 谷に住んでいる。

イドウ族の約20,000人は、住んでいる川の岸によって派に分けられ、名前がつけられている。髪を結ぶイドウ族 (チュリカタ) は他の種族から区別されている。前髪はひたいまでときおろし、耳から耳を結ぶ線で水平に切っている。うしろの髪はたばねて結ばれている。彼らは良い農業従事者である。主な農業生産物は冬と夏は米をとり耕作の仕方は多毛作農業である。また、キビ、トウモロコシ、大豆、えんどう、野菜なども作る。綿やタバコも自分たちのために作る。

イドウ族は商売もうまい。ときどき、山からおりてきてお面や動物の皮、寒天なども売り、塩、布、そして、他の日用品を買って帰る。量は少ないが売るためのゴムも作っている。

○ミジュ族

ミジュ (カマン) 族はタラオンの東、ロヒット谷に住んでいる。人数は14,000人ほどである。カマン族のほとんどはビルマのカチン地方からやってきたと称している。カマン族はイドウ族とは異なり、髪を長くしている。服は丈夫で大変色どりが良い。カマン族、特に女性は色や形にすぐれたセンスをもっている。一部木線を使って、服は自分で作る。農業が彼らの主な職業である。

○ディガルー族

ディガルー (タロン) 族は上部ロヒットの西の方に住んでいて、この地方にはカマン族も住んで

いる。ディガルー族は自分たちをタロン族と呼んでいる。タロン村はばらばらと家が集まっているだけである。女は黒いシャツを着、うすい銀の板のバンドを頭のまわりにまき、大きい耳輪をしている。タロン族は農業を仕事としている。

○カムプティ族

カムプティ族は北東にパラスラム・クンド (Parasuram Kund)、南にティラップ地区があり、カムラン、デヒン、テングパニイの川に沿ったロヒット地区の南部に住んでいる。彼らはビルマのシャン州から移ってきたと信じられており、タイ語に属する言葉を話している。ほとんどの人が読みかきができる。

カムプティ族は優秀な工芸職人であり、商売人でもあり、秀れた農業従事者でもある。土地を共同で耕し、労力を提供した人々に生産物を分割する。カムプティ族は“知識と芸術と文明の点で、他のすべてのNEFAの種族とはかなり進んでいる”と注目されている。彼らは仏教徒である。

○シンフォー族

シンフォー族はティアン (Teang) とノア・ディン (Noa - Dining) 川の岸に住んでいる。そして、南東へむかってカムプティ族の土地に広がっている。彼らは北部ビルマのカチン系種族に属する。言葉はマニプリ・クキ、アポール、カレンの各種の系統であり文字はシャン族のものである。彼らはモンゴル族の顔つきを発展させた立派な体格の種族で、皮膚の色は黄色か暗い茶色がかったオリーブ色をしている。種族の長の家族を除いて女性は重労働のために粗野な様子をしている。男は手足に少し入れずみをして楽しむ程度だが、結婚した女性は足に、くるぶしからひざまで幅広い帯状の入れずみをしている。彼らは鍛造屋としてすぐれており、特長のある鉄の道具を製作する。女性はすぐれた織工である。彼らは仏教徒であるが、同時に多くの精霊を信じている。

Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

“ 魅惑の インド・ヒマラヤ ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・

へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED

1701, Nirmal towers

barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-3972 JCIIN cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



カンチ通信 No.6

5月28日ヤルポディンにて

ナマステ // 前便No.5を書いたから1ヶ月半が過ぎました。この間ベースキャンプ入りしてから35日間偵察隊の登山に関する目標のほぼ全てを達成し、本隊の基本計画を作成することが出来ました。ヤルン谷に入った別のスパーティの成果については以下のとおりです。

1) メキシコ隊

5月4日隊員2名とシュルパ1名がPM5:00ヤルン、カン(8,505m)の登頂(第3登)に成功したもののシュルパのみが生還。隊員2名は遂に戻りません。詳細は不明、ファイナルキャンプは7,700~7,900m 5月12日下山。

2) 西独隊

5月15日隊員1名とシュルパ3名がPM2:00カンチ主峰(8,598m)の第5登(5/14同志会が成功と云う噂を前提にして)に成功。シュルパ1名はノー酸素。ファイナルキャンプは7,650m。5月17日下山開始するも150個近い荷があり、殿りは我が隊のすぐ前。

我々は5月23日BCを撤収。しかし、15名のポーターが集まらない。西独隊が苦労しているのも、農繁期のためでもありうるらしい。23日下山日に

は、1973年ヤルン・カンに眠るAACKの故松田隆雄氏の墓を全員で参拝した。コーナー台地は我々のBCから1時間半であった。

5月27日約2ヶ月ぶりに最奥の部落ヤンポディンに着きました。ラミテ付近の3,000mでは藪鶯が、2,000mでは、カッコウとセミが鳴き、このテントサイトでは早くもコオロギと鈴虫が合唱しています。モンスーン前の風情でしょうか。

ツェラムからの下りでは、あんなにも全山を覆ったラリグラスも流石に終りとなり松や杉にからまるサルオガセが目立ちました。ヤンポディン近くでは野イチゴ(赤)木イチゴ(黄)が新鮮な果物として我々を喜ばせ、又馬鈴薯の白い花が日本を思い出させてくれます。

帰路キャラバンは「イラム」に出て車にてカトマンズへ向う予定です。ダーズリンは近いのですがビザがないので全員諦めて、カトマンズで報告書をまとめ順次帰国(6月15日以降)の予定です。最後のカンチ通信No.7はイラン迄のキャラバン風景をカトマンズからお届けします。

ヤンポディンにて(山森記)

カンチ通信 No.7

6月6日カトマンズにて

5月29日、20名のポーターと共に最奥の部落ヤンポディンを出発。イラムまで8日間の請負制で契約したため、朝6時半から夕方6時頃まで歩くと言う強行軍でイラムには6日後の6月3日到着。さすが強者揃いの隊員達もいささか疲れ気味でした。

イラムの一日手前に「スケボカリ」と云うカンチエンジュンガ山群の展望台があります。標高2,650m夜は少々冷え込みますが、シッキムのパンディムの秀麗な姿を見ることができ、何よりも疲れた体とはいえ、おいしい「ロキシー」があります。

イラムからは、チャーターバスでインドとの国境の街「カカルピッタ」で一泊し6月5日ダマン峠から夕焼のカトマンズ盆地を見下ろしPM6時

無事カトマンズに帰着しました。

拙い通信でしたが、これにてカンチからの報告を終了いたします。(山森記)

カンチ偵察隊帰国

御支援いただきましたカンチ偵察隊は、予定の偵察活動を終え、6月28日、山森隊長以下、若尾山田、角田、片岡隊員の5名が無事帰りました。

遠征学入門

XV

実践編

遠征時期と期間の 決定について

清水 澄

前回までは遠征の実践に関する精神論、観念論を述べた。尽くせぬ部分が多いが、いつまでもそこに執着していたのでは遠征は前へ進まないのだから、今回からは実務的、技術的な遠征構築の方法論について述べて行きたい。つまり実際面での決め方、考え方、行ない方といった部分、カッコよく言えばノウハウとか言うようであるが、清水式遠征イロハと思っていただきたい。こうなると具体性を増すので、多くの遠征分野中の登山、それもヒマラヤ登山に限って述べさせていただくしか能力がない。またあくまで一般論であることをご承知願いたい。

気象に制約される登山時期

登山時期の決定は、目指す登山に最も有利かつ隊員にとっても好都合な時期とされるのが普通である。しかし、積極的に厳しい気象の時期を選んでの挑戦も、最近では考えられる様になって来た。

一般的に、ヒマラヤでは春か、秋の季節が選ば

れる。春は、低温と強風の厳しい冬が終り、雨期である夏に入る以前の、温暖な天候安定期で登山に好適である。雨期（モンスーン）の前という意味で、プレ・モンスーン期と言われる。一方秋はポスト・モンスーン期と呼ばれ、雨期が終り、冬の強風が吹き出すまでの天候安定期である。

プレ・モンスーンとポスト・モンスーンではそれぞれ長短があり、一概にどちらが有利とはいえない。プレ期は日毎に暖かさが増し、日照時間も長くなる利点がある。けれども、判然とは予定し得ないモンスーン開始期に追われての登山であり、余裕を多くとるための入山時期の繰り上げは冬の雪に悩まされることになる。アプローチでの峠越え、又はベース・キャンプ付近の標高の高い所で雪に遭い難儀する話は、キャラバン開始時期の早い登山隊では、ままあることである。従って後述する登山期間とも関連するが、期間を長くするという目的のみで入山時期を早くすることは、あまり得策とはいえない。通常は3月末か、4月始めにベース・キャンプ入りとなるべく、予定を組むのが普通である。モンスーンが始まるのは平常では5月下旬頃とされているので、登山期間としては普通には充分である。

これに反してポスト・モンスーン期は、日毎に寒さが増し、日照時間も短くなることが不利とされているが、雨期終末期のうちにベース・キャンプ入りは勿論のこと、その上の低所キャンプを作るぐらいの登山は可能である。この様にすればモンスーン終了と共に高所に出て、厳しい寒気がせまる前に登山を終ることが出来る訳である。雨中のキャラバンは苦労も多いが、プレ期の雪の峠越えといった決定的なトラブルは少ない。モンスーンは9月上旬ないし中旬に明ける様であるので、8月20日近辺をメドにキャラバンを開始する登山隊が多い。ポスト・モンスーンの終末を限るのは、冬の風と言われる偏西風の吹き出しである。一般に11月に入れば登山には全く不向きになるということで、10月中に終るように予定が組まれる。当然高ければ高い山ほど風、寒気とも厳しくなる訳で、早く終了しなくてはならないのであるが、攻略には手間どるので相反する条件となってしまう。

しかし登山期間としてはやはり普通には充分で

あり、この点ではプレ・ポストとも大差ない。

さてこの時期の気象の概況であるが、ヒマラヤでは他の季節よりも安定、良好であり、登山シーズンとされる訳である。けれども小さな変化は起っているの、いつも天気は良いものと信じてはならない。プレ・ポストとも大概は午後には、日射により暖められた上昇気流によって雲が発生し、それが降雪となることも多い。その際、雷をともしう場合がある。しかし夕刻には晴れる。これは日常変化であり、降雪も大過はない。問題なのは終日の崩れであり、大雪の降ることもあるので、雪崩などに充分の注意をする必要がある。この方は低気圧、不連続線、局所気流などによって起るものであり、どちらかという湿潤な空気の多いプレ期により多く起き、それもモンスーン期が近づくにつれて更に多くなると考えられているが、ポスト期も安心できるというものではない。この変化はマスの気象通報ではなかなかとらえにくいので、登山隊としては観天望気が大切となり、その山岳での変化のパターンを早く掴むことである。勿論、現地で放送されている気象通報の高層気象の変化をキャッチすることは重要である。が、一般の登山隊ではそこまで手がまわらないのが実状のようである。要は今遭遇している気象の崩れが、日常変化によるものなのかそうではないものなのか適確に、しかも早急に判断して処置をとることである。ヒマラヤでは少々多い目の雪(10 cm程度以上)が降ったら、新雪表層雪崩は必ず出るものと思わなくてはならない。

このことについては、新たに頃を設けて詳述を試みる予定である。

順応と衰退が作用する登山期間

期間をどの程度にするかは遠征デザインの上で重要である。一般に高い山、むづかしい山でも時間をかければ、何とかなるものと思われる。しかし実際には、資金、休暇、規模などに制約され、更に現地の気候などの影響も受けて、いたずらに期間を長くすることは出来ない。更にヒマラヤのような高所登山では、人体に与える高所の影響によって、限られた期間でしか登山活動をする事が出来ないのである。

高所では酸素が充分にとれないため、人体はさまざまな影響を受ける。この影響に打ち克つ能力が高所順応の力であり、如何にうまく順応するかが高所登山の最大の課題である。最近の高所医学によって順応(順化)の問題はかなりにまで解明されてきたが、それでも未だ解らないことも多いという。ここで高所順応の問題を論ずるつもりはないので、登山期間を定める上で必要な最低の知識だけを記すにとどめる。人間が一世代だけに限って永住できる高度は 5,400 m であり、それ以上の高度では一旦順応した体も、いつかは衰退して死に至る。しかし滞在の期間が短かければ、衰退する方は目にみえず、十分に順応して活動が出来るのである。けれども更に高度を上げ 6,800 m 以上になれば、もはや順応の能力も衰退の勢力に克つことが出来ず、日一日と弱ってしまう。そこで高所登山では、6,800 m 以上での滞在を極力少なくすることは勿論、総体の登山期間を妥当な限り短かくすることが必要となる訳である。登山期間が短かければ短かい程よいという訳にいかないのは、人体が高所に順応するのにある程度の期間を要する為であり、更に高所に登ればまたその高度に順応しなくてはならないからである。

期間を長くとり、セオリーに従えば順応はうまくいくが、長くなり過ぎると今度は体が弱ってしまう。そこで、そのバランスのとれた適当な期間を定めなくてはならない。数多くの登山隊の経験から知られたことは、ベース・キャンプ以上での登山行動が45日程度が一番良いということである。これより短縮出来るのは、山が低くて行動日数に多くを要さない場合のみである。逆に、山が高く困難でこの日数では到底登れない場合は、行動率休養(なるべく低所で)、酸素などで、体力を衰弱させない様に補っていかねばならない。

そこで登山期間は45日を標準とし、山の難易、高低、好天率などを加味して定めなくてはならない。しかし通常は余程事情の解っている山でない限り、45日以下の日数とすることは得策ではない。折角頂上を目前にして、時間切れ、物資切れでは、遠い所を遠征に出かけても悔いが残ろうというものである。

ヒマラヤの虎（２）

五百沢智也

ネパールのタイガー・トップスでの経験がきっかけとなって、ヒマラヤ山麓の野生動物を含む自然観察に興味を持った筆者は、インドでも、コーベツト国立公園とカジランガ野外動物保護区の２個所で観察旅行を試みてみた。

ニューデリーのウツタルプラデシュ州事務局に行つてコーベツト公園の宿泊申込みをやつたところ、一晚のキャンセルがあるだけで、あとはしばらく満杯がつづいているということだった。そこでとりもなおさずその一泊を拾うことにし、さっそく30ルピーの前金を支払つた。

コーベツト国立公園は丘陵都市ムスリーとナイニタールを結んだ中間地点にある。デリーから見れば東北東の方角で、距離は直線で約200kmといたところか。

インドには合計19の野生動物保護地区があり、アジア唯一のライオン棲息地であるギル森林や、一本角白サイや野生インド象の多いブラマプトラ河畔のカジランガ湿原などは有名である。

ヒマラヤ山麓では、カシミール州のダチガム保護区、ウツタルプラデシュのコーベツト国立公園西ベンガル州でブータン国に近いジャルダパラ保護区、アッサム州でやはりブータンに近いマナス保護区の４つがある。

コーベツト国立公園は、1935年の創立以来ハイレイ国立公園と称して来たものを、狩猟家としてそして作家として有名なジム・コーベツトの名を記念して1957年に改名されたものである。

公園の地理的位置は、ネパールのチトワン国立公園と似ていて、ヒマラヤの南縁部にあるシワリーク丘陵にかこまれたデューンというかダウンというか、沙羅双樹（*Shorea robusta*）林におおわれた盆地地形のところであり、北緯29度30分、東

経79°の附近の一帯にある。ここはジム・コーベツト氏が作品の中で紹介した虎の生活舞台そのものであり、F. W. チャンピオン氏の虎の写真も多くはこの地で撮影されたものである。

この保護区で見られる野生動物は、虎のほかに、豹、ハイエナ、ジャッカル、野生犬、野生象、サンバー（大鹿）、チタル、ホグ鹿、はえ鹿、熊が２種類、ワニもクロコダイルと鼻先のとがって長いガリアル、それにマッガーの３種が住み、マアシアという大型の魚もいる。鳥も鶯やインドトキコウなどかなり豊富だ。こうした保護区は、樹木や草の葉が繁っている期間は、動物たちの生活はいいが観察には不向きな時期である。コーベツトの最適期は３月、４月で、魚釣もこの期が良い。５月もまあまあだがちょっと暑すぎるし、２月もまあいい方である。

筆者がキャンセルを拾つたのが1973年の3月19日の夜の分だから、時期としてはベストというわけであった。曜日も月曜だからどこも休みのところはない筈と、前日に長距離バスのターミナスビルに近いところに宿がえし、そのターミナスまで歩いて乗り場と時間をたしかめておいた。ここまでは良かったのだが、あとが良くなかった。

さて当日、５時30分起床、６時15分朝食、６時半出発。ターミナスの乗場へくると様子が変だ。バスがないしお客もすくない。いつもここターミナスは各州へ出る長距離バスが早朝発が多いので暗いうちから混みあっていて、バスもたくさん荷物のつみこみをやっているはずなのに、ガランとしているのだ。訊くと今日はホリデーだからバスは出ないと言うのだ。このホリデーは聖なる日すなわちホーリーデーで宗教行事がくる祝日なのだった。ヒンドーの神話の変装で敵をあざむいて

村人は菜種油を使用しているが、トレッカーには、サラダ油、バターで料理すると言う。パンやチャパティに、イチゴジャムやママレードが再々出されたが、これらは中国産で、ハチミツは濃度こそ薄いネパールで採取される。

(二) 野菜及び果物

ポーターが背負っていた竹籠には、ピーマン、人参、胡瓜、カリフラワー等、形こそ小さいが、我国にある野菜は殆ど見受けられた。山路には、いら草、わさび、里芋もあり、農婦が摘んでいた青菜は炊めて食べると言う。野菜の炊め料理を総称しカーリーと呼び、油を使用し有色、無色野菜からのビタミン利用を大にしている。果物も豊富で、Jalbire を過ぎた 945 m 地点で大きなマンゴーの木を 1,080 m Kalam Sangn を少し下った所には、バナナが生育している。林子、オレンジもあり、特にオレンジは、疲れた身体には、とても美味しく、ビタミン類も、量を確保するなら不足はなからう。

一つの村に定着し観察した訳でなく、正確な事は言えないがしかし、生きるために、最も大切な食生活も、食品の種類では我国と余り相異なる程、揃っている。唯、その摂取量がどの程度かである。生産されても、自らの健康維持の為ではなく、生活費に消え、住民は粗食をしいられるとすれば問題であり、我国の様に肥満から生じる成人病対策が、叫ばれる昨今と比較し考えさせられる一面である。道路状態が、良くなりつつあるとは言え、この辺はまだ、水田のあぜ道に手を加えた程度が街道で、終日、あえぎ登る農民には、徒歩交通以外の何物もない。それ故、消費エネルギー大きく、肥満になるには及ばないのかもしれない。

食事はもちろん、荷物から、テント張り全て他人まかせで、まさしく大名登山である。ポーターの中には、童顔の少年から病弱な大人と、体力、年齢差があるにもかかわらず、荷物は殆ど同量で職業と言ってしまえばそれまでだが、大変な労働である。

<服装及び装飾品>

朗らかなシェルパニーを始め、村人の服装が入り混んだ山合いの自然に調和し、素朴な、心が伝わってくる様で捨て難い情景の一つである。女性

の全てが農作業の時でさえ、ネックレスやブレスレット、指輪、イヤリングを身に付け、中には鼻輪をしている人もいる。これは、お守りの役目もしているそうで、そう言えば乳幼児までがネックレスをしている。驚いた事に 2,175 m Ghytche で 70 才位の老婆が耳に 2 個もイヤリングを通し、其の一つは、赤青黄の石細工を施した、直径 5 cm 位の円形で、良く見ると重い為か、更にひもで耳に引っ掛けている。この老婆は、美しいチベタンシューズをはいていたが、写真を撮り終るや否や素足になって来た。大部分の村人は、素足である。村人にとって写真は貴重な品で、玄関先にカタと呼ばれる白いレースを掛け大切に飾っている。

2,550 m Gorumo 村で、写真を撮る為に正装して現われた老婦人も、道中、堆肥を運んでいた若い娘達も皆、巻スカートの民族衣裳である。緑青紫系、赤、ピンク、オレンジ系、黄色と多彩で、図柄は渋い無地も多いが、唐草模様の大小や横縞模様、そして小花を散りばめたのが多く、大胆な抽象模様は見受けない。一枚の布を上手に巻き、中には、歩きやすい様、箱巻を数本入れ結んでい人もある。又、衣裳が、どんなに汚れ破れていても、女性（子供でも見受けた）は一反もありそのような白地を腹部に巻き付けている。冷から身体を守る生活の知恵だろうか。

<神聖な水場（パーニコダーラ）>

ネパールの女性を知るべく、早朝の水場をのぞいてみた。なる程、暗い内からピカピカに磨かれた水壺（ガロワ）をかかえ、三々五々現われた。ヒンドウ教では性の悦びを表現した偶像物が多くあちこちの村で見受けたが中でも、この水場は神聖な所と考えられ、Galtige では男性のシンボルを型どった水口からは、冷たい水が流れ、下の受石は女性を表わし、傍には石像が貼り付けてある。又、何年前の建物か判らないが Chautara の寺院で見た軒柱にも、性の営みを彫った沢山の木彫があり、見事な出来ばえである。美的感覚の鋭いネワール人の作だろうか？ Kalam Sangu から Jalbire に来る途中、大きな菩提樹の横にヒンドウの MAHADEP 神を奉り TIPSOL と呼ぶ 3 本の木を型どったものと共に、やはり男女を表現したものがある。

話は横道にそれたが……。洗顔の時、サリーの端を上手に後へ廻し、濡す事はしないが手拭き代りに手鼻をした後も使っている。歯やガロワは墨の様な棒を石上でこすりそれで磨いているところをみると木炭かもしれない。彼女達に手鏡と化粧品を勧めてみた。それはどこの国の女性も同じで無器用であったが、恥ずかしそうに化粧し、ニコニコしながら消えて行った。

<温泉 (タトパニ)>

鼻歌の一曲も出そうな、のんびりした日本の温泉を考えてはいけな。Kodari の近くにタトパニがあると聞き喜んだのもつかの間、適温の湯が多量に出ているが、ひざ下までしか溜めず、しかも、サリーを着たままの水浴で、更に、その中で洗髪をし、郷に入っては郷に従えと言えども、その時はとても入る気にはならなかった。道中小川の流れて水浴をしている笑えましい親子にも出会った。

<踊 り>

陽が沈む頃には、何処からともなく村人が集まり、たき火を囲み、太鼓、ハーモニカ、ウクレレに似た楽器に合わせ、隊員共々一日の疲れを忘れ歌い踊るのも、和やかで嬉しい。リズムは、強弱を交互に入れる単調なものだが村人にとっては最大の娯楽である。

電燈の無い彼等は、たき火が唯一の明りで帰路を照らすべくそのたき火を1本2本と手にして行く姿は、浪費生活に慣れ、しかも文明大国と思いつ上っている者には、反省を余儀なくされる。

カセットコーダーには、シェルパーや、村人の唄が沢山録音されて居り、その時々状況を思い出させてくれる。

機械文明に振りまわされ、一刻一秒を争う毎日から離脱した数日であるが、険しい山村に生きづく村人の生活に触れ、人間本来の協同生活をみた思いである。

事務局日誌

月日	曜	摘	要
6. 1	日	カンチェンジュンガ委員会 (ルーム)	
2	月	H. C. サリーン氏連絡	
5	木	S. クマール氏連絡、カンチ偵察隊よりカトマンズ帰着連絡	
6	金	ナンダ・コットアプリケーション作成	
7	土	文部省提出資料タイプ、特別講演会	
8	日	(郵便貯金会館)	
9	月	ナンダ・コットアプリケーション提出	
13	金	事務協議 (岐阜 稲田・岩水)、資金協議 (名古屋)	
14	土	運営協議 (多治見 柴田会長宅 会長稲田・岩水)	
16	月	インド・ヒマラヤ研究会アレンジ文書送付	
17	火	「ヒマラヤ」104号校正	
18	水	カンチ偵察隊 (山森・山田・若尾・角田) 帰国	
19	木	在カトマンズ菊地評議員とTel、山書の会ルーム使用	
20	金	「ヒマラヤ」104号完成	
21	土	S. R. シャルマ氏手紙	
23	月	「ヒマラヤ」104号発送	
24	火	マスコミ関係、後援協議 (岐阜, 名古屋)、インド・ヒマラヤ集会 (岐阜)	
25	水	日本山岳協会 高橋・丹部・鎌田副会長と協議 (稲田・山森)	
26	木	文部省資料作成	
27	金	〃	

月日	曜	摘	要
6.28	土	文部省へ登山学校説明 (山森)	
29	日	ニューデリー菊地評議員とTelにて打合	
30	月	都岳連へ法人関係協議、東京定例集会 (ルーム)、運輸省協議 (山森)	
		事務局員 松本正城氏本日付で退職	

◎編集部移転のお知らせ

本誌101号から行なってまいりました臨時編集部での業務は、今月号をもって終了いたします。

今後は、従来通り下記において業務を行ないます。5ヶ月間の御協力を感謝いたします。

ヒマラヤNo.105 (8月号)

昭和55年7月15日印刷 55年8月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 伊 東 満

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160東京都新宿区高田馬場3-23-1-506

郵便振替 東京0-48954「日本ヒマラヤ協会」

ヒマラヤへの装備



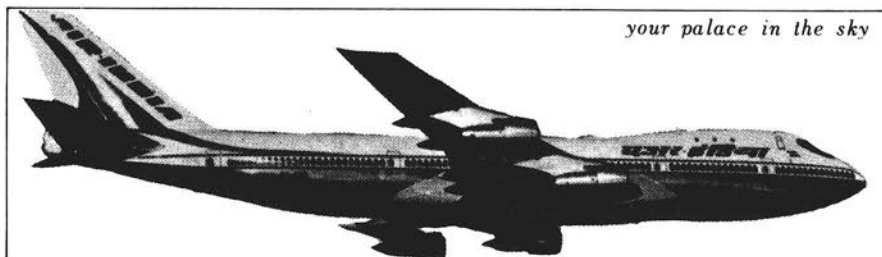
◎遠征隊の装備、相談にのります。



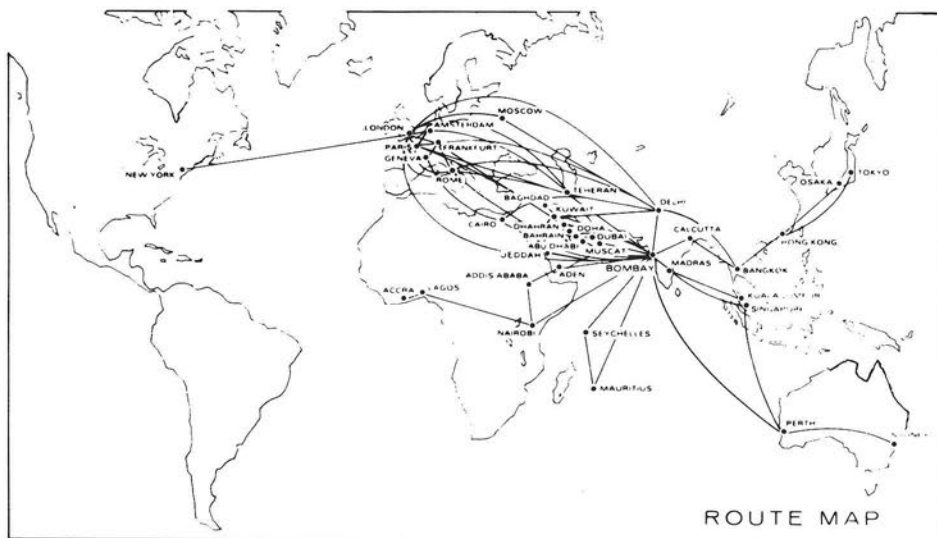
ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2-2-3 ☎03(208)6601代
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2-19-10車とビル ☎03(200)7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の耕井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7-35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052) 583-0747

世界の40都市をネットする
エア・インディア

東 京●千代田区有楽町日比谷パークビル	〒100☎(03) 214-7631
横 浜●中区常盤1-2 関内日本ビル	〒231☎(045) 651-2874
大 阪●東区備後町松豊ビル	〒541☎(06) 264-1787
神 戸●萺合区布引2-1-3 新布引ビル	〒651☎(078) 222-1919
福 岡●博多区博多駅前1-3-21 八重州ビル	〒812☎(092) 471-7172